

中国北方青銅器文化に関する日中共同研究の報告書

著者	小田木 治太郎
著者別表示	ODAGI Harutaro
雑誌名	金大考古
号	82
ページ	30-32
発行年	2023-03-31
URL	http://doi.org/10.24517/00069161



<研究動向>

中国北方青銅器文化に関する日中共同研究
の報告書

小田木 治太郎

中国北方青銅器文化の遺物は早くから収集資料が知られ、それらを中心にした研究が先行していた。また、とくに 1980 年代以降は中国の研究機関による現地調査を経た資料が増え、蓄積が進んでいる。ただし、これはどの分野にも共通することではあるが、資料に関する情報にはおのずと粗密が生じており、研究に活かされてない実情がある。

このような現状のものと、筆者が代表する研究グループは、2012 年以降、中国の研究機関と合同で中国長城地帯の青銅器文化遺物の調査を進めている。調査は、資料の複数方向からの写真と法量計測といった型式学的情報の取得に加えて、蛍光 X 線分析を含む。これらの成果はすでに 4 冊の報告書となっており、ここに紹介するものである。なお調査お

よび発刊は、科研費 24520871、17K03222、および 2016 年度天理大学学術・研究・教育活動助成によっている。



図 1 『東アジア飾り帯文化の生成過程』
The Process of Formation of East Asian Ornamented Belts (2015)

1. 『東アジア飾り帯文化の生成過程』(図1)

2012・2013年に^{オルドス}鄂爾多斯青銅器博物館と共同で行った同館資料調査を基礎とし、西溝畔2号墓、同3号墓、碾房渠、石灰溝などの出土品165件を報告する。加えて、「研究の目的と経過」「帯飾板と鳥形鉸具」「帯金具の動物意匠」「蛍光X線分析」の考察と、「オルドス青銅器博物館の概要」を掲載する。執筆者：小田木治太郎・王志浩・廣川守・菊地大樹。

2. 『中国内蒙古における北方青銅器文化遺物の調査』(図2)

2015・2016年に内蒙古博物院と共同で行った、^{ウランチャブ}同館および烏蘭察布市博物館での資料調査を基礎とし、阿魯柴登、桃紅巴拉、玉隆太などの出土資料、および白家湾の出土資料、計115件を報告する。加えて、「研究の目的と経過」「型式学的調査—帯飾板と鳥形鉸具—」「蛍光X線分析調査」の考察を掲載する。執筆者：小田木治太郎・塔拉・廣川守・菊地大樹・李少兵・索秀芬・李彪。

3. 『寧夏の中国北方青銅器文化遺物の研究』(図3)

2013・2014年に寧夏文物考古研究所と共同で行った、彭陽県文物管理所・中衛市文物管理所・寧夏固原博物館での資料調査を基礎とし、張街村、狼窩子坑、于家莊、楊郎馬莊などの計121件を報告

する。加えて「研究の概要」「寧夏の北方青銅器文化遺物中の金属器製造」「寧夏の中国北方青銅器文化遺跡」「型式学的検討」「蛍光X線分析」の考察を掲載する。なお、本報告書は全文を日本語と中国語の2言語で表示する。執筆者：小田木治太郎・羅丰・廣川守・菊地大樹・朱存世・馬曉玲・王効軍・楊寧国・石宇清。翻訳：秦小麗。

4. 『中国長城地帯青銅器文化遺物の研究 内蒙古編』(図4)

2017～2019年に内蒙古自治区文物考古研究所と共同で行った、同研究所および烏蘭察布市博物館^{かくけんようし}での資料調査を基礎とし、^{きんしゅう}崞県窯子・毛慶溝・忻州^{ようし}窯子、小黒石溝などの出土資料、および白家湾の出土資料、計244件を報告する。加えて、「総論」「内蒙古地域の青銅器時代考古学文化」「金属器の型式学的検討」「蛍光X線分析」の考察を掲載する。本書も全文を日本語・中国語の2言語で表示している。執筆者：小田木治太郎・曹建恩・廣川守・菊地大樹・索秀芬・李少兵・李彪。翻訳：秦小麗。

各報告書の資料報告はおおよそ様式を統一しており、図5がその一例である。資料調査においては、各機関での収蔵状況や調査の時間的制約のために十分でない部分があるが、悉皆的に行うことを目指し



図2

『中国内蒙古における北方青銅器文化遺物の調査(2016)』
Research on Relics of the Northern Chinese Bronze Culture in Inner
Mongolia, 2016 (2017)

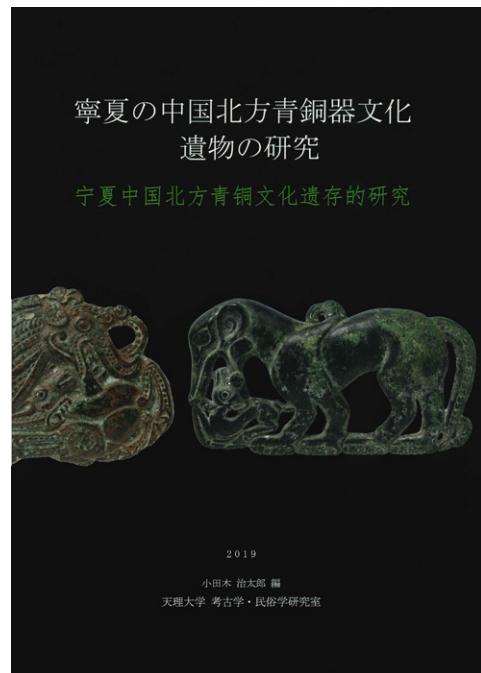


図3

『寧夏の中国北方青銅器文化遺物の研究』
Study on Relics of Northern Chinese Bronze Culture in Ningxia (2019)

た。よって同一型式であっても調査可能なものはすべてを調査した。

また、上述のように各報告書にはそれぞれの調査で明らかになった点を取り上げて考察を加えている。型式学的考察では裏面の様態や断面の構造などに注意し、蛍光X線分析ではこれまで知られなかった材質性状が複数明らかになっている。ただし、蓄積したデータ全体を通しての検討はいまだ十分とは言えない。今後は、同様の調査を続けてデータの蓄積を行うとともに、より深い考察に努めたい。

参考文献：

- 小田木治太郎 [編] 2015 『東アジア飾り帯文化の生成過程』 天理大学考古学・民俗学研究室。
- 小田木治太郎 [編] 2017 『中国内蒙古における北方青銅器文化遺物の調査 (2016)』 天理大学考古学・民俗学研究室。
- 小田木治太郎 [編] 2019 『寧夏の中国北方青銅器文化遺物の研究』 《宁夏中国北方青铜文化遗存的研究》 天理大学考古学・民俗学研究室。
- 小田木治太郎・曹建恩 [編] 2020 『中国長城地帯青銅器文化遺物の研究 内蒙古編』 《长城地带青铜

文化遗物的研究 内蒙古篇》天理大学考古学・民俗学研究室。

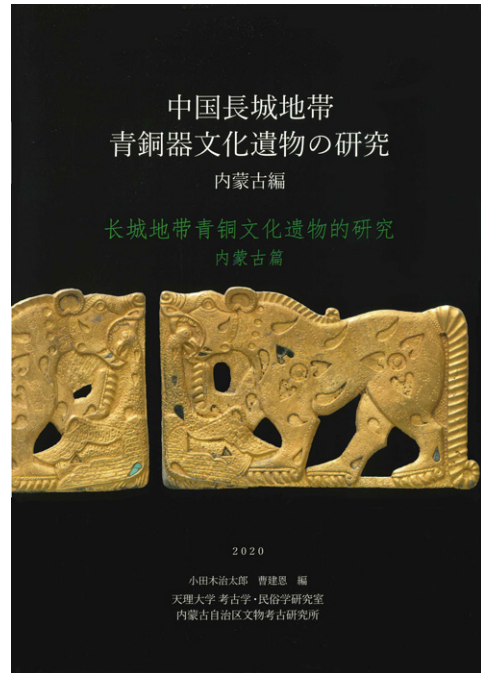


図4 『中国長城地帯青銅器文化遺物の研究 内蒙古編』
Study on Relics of Bronze Culture in the Great Wall Area: Inner Mongolia (2020)

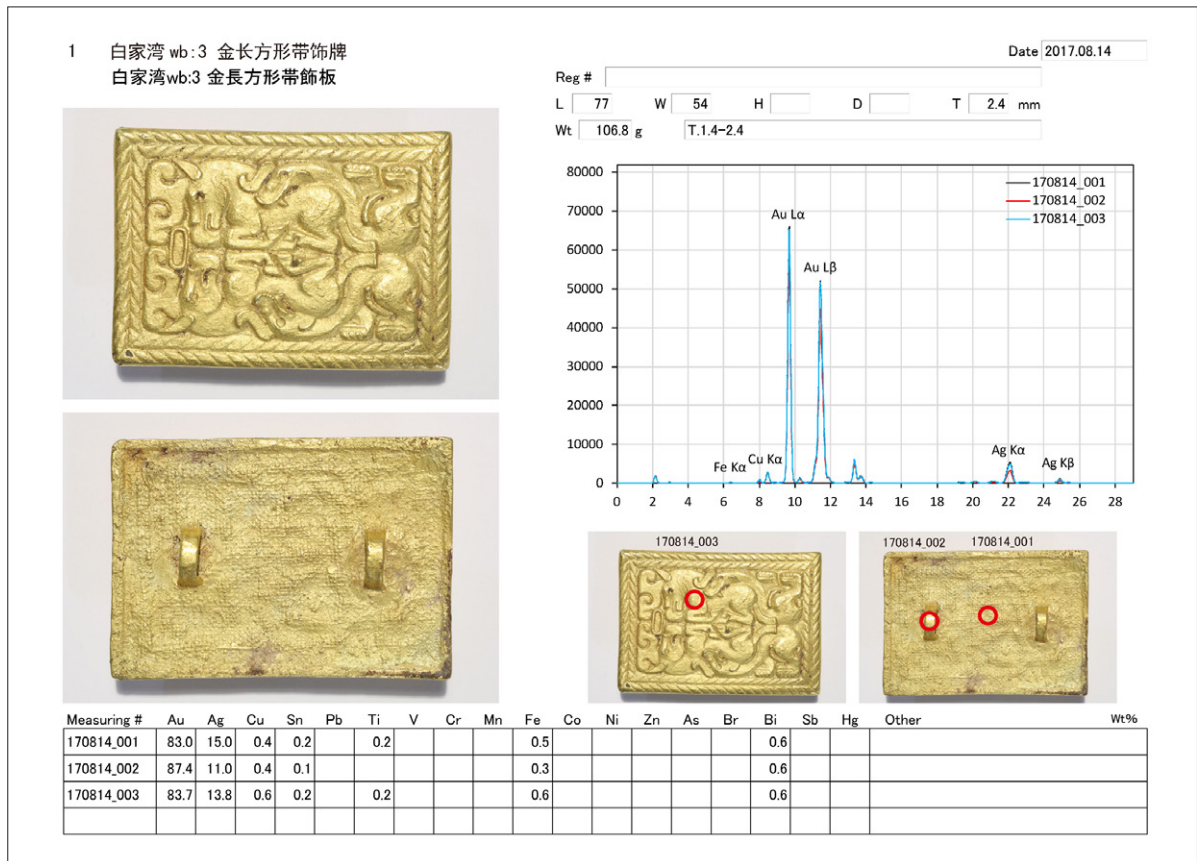


図5 資料報告の一例